

清和源氏のふるさと その2

清和源氏とは・・・

源氏には祖とする天皇別に 20 の流派があり、清和源氏はその一つである。

第 56 代清和天皇の皇子のうち 4 人、孫の王のうち 12 人が皇族の身分を離れ臣下にくだって、源の姓を与えられた（臣籍降下）。その中で最も栄え、清和源氏の代表的存在とみられるのが第六皇子貞純親王の子経基の系統である。

源経基の長子満仲は安和 2 年（969）に藤原北家勢力と反藤原北家勢力との争い、世に言われる「安和の変」で藤原北家に協力した。その結果藤原北家の摂関政治が確立することになる。それに伴い満仲は越前守や摂津守等を歴任し中央における武門としての地位を築くとともに、京に近い多田盆地を拠点に猪名川上流を開発し、強力な武士団を築きあげた。このことから満仲は「源氏の祖」（*）とされ、また現在の川西市は「清和源氏発祥の地」とされている。

長徳 3 年（997）満仲逝去後は、長男頼光が本家の家督を継いだ。多田を本拠にすることから「多田源氏」と言われる。

満仲の息子三人、頼光・頼親・頼信のうち最も武術に優れ「道長四天王」の一員とみなされた三男頼信は河内に勢力を伸ばしたことから世に「河内源氏」といわれる。この源頼信の孫が後年「前九年の役」や「後三年の役」で功績をあげた義家であり、この系統から源頼朝・義経に繋がり、また足利尊氏や徳川家康に繋がるとされる。

このため源氏の嫡流が滅んだにもかかわらず、戦国時代に至る所で「源氏の末裔」が出てくることになる。



（*）源氏の姓を賜ったのは満仲の父経基であるが、満仲が源氏の祖とされるのは、「世に並び無き兵」（今昔物語）として武勇が語られたことや、能・幸若舞に取り上げられた「美女丸伝説」による全国的な知名度のためと思われる。

(1) 頼光寺

源満仲の夫人である法如尼の発願により、子の源賢僧都（幼名美女丸）により建てられたといわれている。当初は真言律宗であったが、現在は曹洞宗の寺院となっている。本堂には源頼光神像が安置されており、また北摂七福神寿老人像もある。

源氏の家紋「笹竜胆」がいたる所にみられる。

昭和49年（1974）本堂再建の時に川西市観光協会から100株のあじさいを寄贈されたのがはじまりで、現在ではいろんな種類のあじさい500株が梅雨時には色鮮やかに咲き誇る。そのため別名「あじさい寺」とも呼ばれている。



(2) 市杵島神社(いちきしまじんじや)

創建は不詳であるが、源満仲は五穀豊穰を計るには水が必要であると考え、水を支配する神様である市杵島姫大神を琵琶湖の竹生島から勧請した。



(3) 小童寺

天延2年（974）源賢僧都（幼名美女丸）により創建された。宗派は元は天台宗であったが、現在は浄土宗である。

本堂の背後には幸寿丸を中心に、右側に美女丸、左側に藤原仲光の墓がある。また渡辺綱ら頼光四天王の墓もある。



美女丸伝説

源満仲の四男、美女丸は素行が悪く、人の言うことを聞かない。見かねた父満仲は美女丸を中山寺に預け、僧になるための修行をさせることにした。その後美女丸15才の時、満仲は美女丸を呼び寄せ、修行について尋ねた。しかし、気ままな生活をしてきた美女丸は和歌や管弦はもとより経文も読めなかった。怒った満仲は家臣の藤原仲光に美女丸の首をはねるように申し付けた。

驚いた仲光はどうしても主君の子の首をはねることができない。困り果てた仲光は「私を身代わりに」



と命を差し出す我が子の幸寿丸の首を断腸の思いでかきとり、満仲に差し出した。その一方で美女丸をひそかに逃がした。

後にこのことを知った美女丸は悔い改めて比叡山に向かう。荒行に励み、やがて源賢阿闍梨という高僧になる。ある時、師に伴なわれて満願寺を訪れた源賢は年老いた源満仲と母に再会し、自分が美女丸であることを明かした。驚き喜ぶ母であったが、その両目はすでに見えなくなっていた。それを知った源賢は阿弥陀如来に誓願をかけ、念じた。7日満願の暁には母の両目は全快した。信心を深めた母は源賢のために円覚院（現在の本坊）を建立した。

この伝説はとても悲しいものであるが、主家と家来の関係が重んじられる武士の生き方を示す話として広まったようである。また、謡曲や芝居などの脚本に取り入れられることも多く、人々に語り伝えられている。

幸寿丸の辞世の歌

「君がため 命に代へる 後の世の

闇路を照らせ 山の端の月」

下財町・山下町とはどんなところ？

・もともとこの地区は源満仲の娘婿塩川仲義が山下城を築き（諸説あり）、その城下にあたる場所であった。町として成立するのは天正年間（1573～91）のころといわれている。

・天正16年（1588）頃豊臣秀吉によって廃城となり、その家臣屋敷跡に秀吉は「山下吹き」と言われる南蛮人がヨーロッパからもたらした精錬の新技术を導入し、銅を量産した。秀吉の時代に多田銀銅山は最初の盛期を迎えた。下財町は精錬所と鉱山関係者が住む地区として、また山下町は町衆（商人・大工・左官など日常生活に必要な技術者など）と呼ばれる人々が住む地区に分かれていった。

・江戸時代になると多田銀銅山は幕府の直轄地となり、多田銀銅山の奇妙山親鉱（*）からの銅鉱を精錬する場所として繁栄した。幕府は産出する鉱物を掌握する必要から、寛文～元禄期（1661～1703）には多田銀銅山の精錬は全て银山町と下財町・山下町の二か所に限定して行われた。寛文年間（1661～72）が第二の最盛期であった。

・平安家は明治以降も精錬を行い、大正時代には新たに近代化された精錬所を平安邸の北東部に建設し、昭和10年（1935）ころまで操業していた。

・これらの地区は周囲とは異なり財力があり、大正2年（1913）能勢電鉄が開業すると、ダンスホールやビリヤード・回り舞台の付いた芝居小屋などが建ち並んだという。



(*) 奇妙山親鉱

多田銀銅山は兵庫県猪名川町を中心に、川西市・宝塚市・大阪府豊能郡にわたり、東西・南北ともに十数 km と広範囲であった。そのなかで主要鉱脈として古い歴史をもつものが二つある。一つは猪名川町銀山を中心とする銀山親鉱であり、もう一つが川西市国崎付近の奇妙山親鉱である。

古い記録によると、天禄元年（970）に銀山川で銀が発見されて、源満仲に献上されたとか。その後多田銀銅山は源氏の重要な宝庫であったことは容易に想像される。

(4) 川西市郷土館

川西市郷土館は、かつて多田銀銅山の精錬所として栄えた場所に、銅の精錬を生業にしていた旧平安（ひらやす）邸を利用して昭和 63 年（1988）11 月に開館した。



① 旧平安邸

この地方の伝統的な民家の特徴を維持する一方、明治以降広まった数寄屋風の和風建築で、大正中期に建てられたものである。

素材は檜と樺が中心で、しかも無節の厳選されたものが使われている。また床柱にも銘木が用いられている。欄間の素晴らしさには目を瞠るものがあり、廊下にも注目。一本の松材でできており、10m継ぎ目がない。

また台所のかまどには銅をあしらい、浴室の壁にはタイルを貼るなど趣向をこらしている。



② 旧平賀邸

日本初の工学博士で化学染料の研究家であった平賀義美博士（1857～1943）が川西市小戸（おおべ）に建設したイギリスのカントリーハウスの形式を持つモダンな洋風建築。出窓と煙突がアクセントとなっている平屋建てで、屋根の形状も独特である。

内部もイギリス流の形式で、端正で洗練されたものである。所どころにあるスタンドグラスは日本のスタンドグラス制作の草分け的存在である「小川三知」の作とか。

阪神高速道路池田線の延伸とそれに伴う猪名川の改修により取り壊される運命にあったものを移築・復元したもの。東屋・門・橋・胸像も一緒に移された。

映画のロケによく利用される。NHK の朝ドラの「マッサン」や「べっぴんさん」が



特に有名である。

「遊び心」もあり、トランプの四つの模様がそれぞれ建物のどこかに施されている。四つ見つけるといいことがあるとか。頑張ってみましょう。

③ 鉾山資料展示室

平安精錬所で用いられていた道具類が展示されている。

そのほか敷地内には川西市ゆかりの日本画家青木大乘と洋画家平通武男の作品を展示した記念館「ミュージゼレスポアール」や平安精錬所跡もある。

(次回予定)

2022.9.23

**兵庫史を歩く No.28 妖怪に立ち向かうヒーローに会いに
闘龍灘～長明寺～北はりま旬彩館**